

掛谷先生の思い出

石井 彰 次 郎

駒沢大学は旃檀林として発足して以来、四百年にもならんとする長い歴史をもっているが、わが経営学部は昭和44年の設立であって僅か17年しかたっておらず、本学中で最も若い学部である。それだけに新鮮な空気の下、初代学部長の佐々木吉郎先生を中心として十数人の教員スタッフで出発したのであった。もっとも当初の研究・教育施設の不備はいうまでもなく、しかも尖鋭化した学生運動に対しても多大のエネルギーを割かなければならないという状態であった。発足後一年経過した翌昭和45年に佐々木先生が御逝去され、そして学科主任であった掛谷先生が学部長となられて、学部運営の重責を担われることになったのである。今日のように物資が豊富・過剰ですらある時代は、精神的飢餓あるいは断絶の時代ともいわれ、かえって物不足の時代において人々の気持は、比較的相寄るものであるのと似て、プレハブ建て二階の、簡易な間仕切りの狭い研究室に複数の教員の相部屋生活の当時の方が、お互いに頻繁に行き来し、和気あいあいとした雰囲気はそこはかとなく感じられたのであった。そしてわれわれは、佐々木先生に対してオヤジ的感覚から尊敬と安堵とを、温和で静かな掛谷先生に対しては“ジェントルマン”的親しみを感じたのであった。

掛谷先生は、明治44年のお生れであり、したがって明治・大正・昭和と三代を生き抜かれた訳である。昭和7年に、当時の東京帝国大学法学部に入学され、卒業後、日本製鋼所に入社し、人事・労務畑一本槍で勤められ、労務部長にまでなられ、昭和40年に退社なさっている。そしてこの間、昭和37年に広島大学工学部工業経営学科で非常勤講師として教壇に立たれているのである。先生が

大学に入学された年は、前年の満州事変を経てわが国の軍国化へのより一層の傾斜がみられた年であるが、反面、労働運動の面においては、東京の地下鉄ストが決行され、社会大衆党の結成もみられ、また「日本資本主義発達史講座」の刊行の開始や、唯物論研究会も設立されているのである。だが「非常時」の進展とともに、労働運動への弾圧が強まり、大学を卒業された昭和11年にはメーデーが禁止されるという有様であった。当然、労働法の研究も、当時においては日の当らない学問分野であったといえるのである。それが、戦後の解放とともに労働法や労務論は、時代の脚光を浴びることになったのである。かくて掛谷先生の長年の研究成果も、昭和26年の、賃金額体系全般の理論的解明と実態分析とを内容とする「賃金制度の理論と実態」（労働法学研究所）から始まって、その後多くの著書・論文として次々と発表され、学界はもとより事業界をも大いに裨益したのであった。

豊富な実務経験に裏付けられた理論は説得力をもち、教場の多くの学生たちも、先生の講義に等しく満ち足りた思いを抱いたのであった。色白で痩身、しかも物静かな先生ではあったが、時には宴席で音吐朗朗と詩を吟じられてわれわれをびっくりさせたのであった。その時の吟じ終られて恥かしそうにほほえまれた先生のお顔が、今でもはっきりと思い出されるのである。人間はいつかは死ぬと判っていても、ほんとうに寂しいことである。

先生の御冥福を心からお祈りする次第である。

昭和61年3月21日